



Title	在来知を活用した自然資源管理に向けて：内陸アラスカ・サケ管理の事例から
Author(s)	近藤, 社秋
Issue Date	2018-05-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/72390
Type	conference presentation
Note	北極域研究推進プロジェクト（ArCS）平成30年度プロジェクト全体会合. 2018年5月10日. 海洋研究開発機構 横浜研究所、横浜市.
File Information	ArCS7_kondo.pdf



[Instructions for use](#)

在来知を活用した自然資源管理に向けて：内陸アラスカ・サケ管理の事例から

近藤祉秋(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

①本研究の位置づけ

ArCSテーマ7では、北極域の人間と社会に関わる諸問題に関してロシア・サハ共和国とグリーンランドをフィールドとした研究が進められてきた。本研究は、比較研究の一環として内陸アラスカ先住民とサケの関係を事例とした民族誌調査をおこない、テーマ7で扱う課題のひとつである「北極域における環境と人間のインタラクション」の解明に貢献しようとするものである。

②本研究の手法

本研究では、2012年から2016年にかけて内陸アラスカ・クスコクム川上流域に位置するニコライ村において計14か月の民族誌調査をおこなった。ニコライ村の概況は右に示した。現地調査の成果として(A)対象地域の社会生態史の解明、(B)在来知と科学知の協働可能性を示すデータの獲得、(C)現地住民の政策と生活設計に関する要望の記録が挙げられる。本ポスターでは、上記3点について簡単に報告する。詳しくは末尾の文献リストに挙げた個々の論文を参照されたい。

調査地の概況

ニコライ村

人口：93名(2010年現在)

民族集団：ディチナニク人、ユピック、ヨーロッパ系

生業：狩猟(ヘラジカ)、漁撈(サケ、ホワイトフィッシュ)、賃金労働(学校、評議会)

③クスコクム川上流域の社会生態史

クスコクム川上流域の社会生態史は、自給経済(～1900年代初頭)、毛皮経済(1900年代初頭～1960年代)、石油経済(1970年代～)の3期に大きく分けることができる。

自給経済期においては、各川筋の集団がカリブーの集団猟、ヤナや魚網を用いた漁撈で獲得した食料をもとにした生活をしてきた。20世紀初頭のゴールドラッシュの時期には、疫病が流行し、生き残った人々がニコライ村、近隣のテライダ村などを形成するようになった。この時期、毛皮交易への適応のため、捕魚車、鉄製の罠、犬ぞりが導入される。これによって、食料獲得のための狩猟・漁撈と商品を得るための毛皮動物を対象とする罠猟を同時におこない、生活に必要な資源を調達する生活様式が生まれた。1920～30年代には、連発ライフルの導入を含むさまざまな要因により、主要な食料源がカリブーからヘラジカへと交替した。アラスカ州への昇格(1959年)以降、先住民のサケ漁撈に対する規制が強化され、1960年代後半にはヤナができなくなった。毛皮交易は1960年代以降、衰退するが1970年代には石油産業が発展し、州の税収が増えたことから村のインフラ整備が進む。石油経済期にはカヌー、犬ぞりといった従来の移動手段からモーターボート、スノーモービルといったガソリンを利用する移動手段への転換が生じた(近藤2017a; 2017b)。

④在来知と科学知の協働可能性

クスコクム川上流域のディチナニク人にとって、サケは重要な生活基盤の一部をなすものである。前項で示したさまざまな時代の移り変わりに応じて少しずつ形を変えながらも、サケ漁は継続されてきた。そのなかで2010年代から続くマスノスケの遡上数減少は大きな社会問題となっている。その原因として、気候変動による海洋環境の変化、商業漁業の際の混獲などさまざまなことが言われているが、内陸アラスカ先住民の人々は、ビーバーダムの増加による遡上阻害が原因のひとつであると指摘してきた。しかし、北米の漁業管理学では、サケ管理の一環としてビーバーダムを撤去することによって、逆にサケの生育環境を破壊してしまった経緯があり、現地住民の見解は真剣に検討されてこなかった。

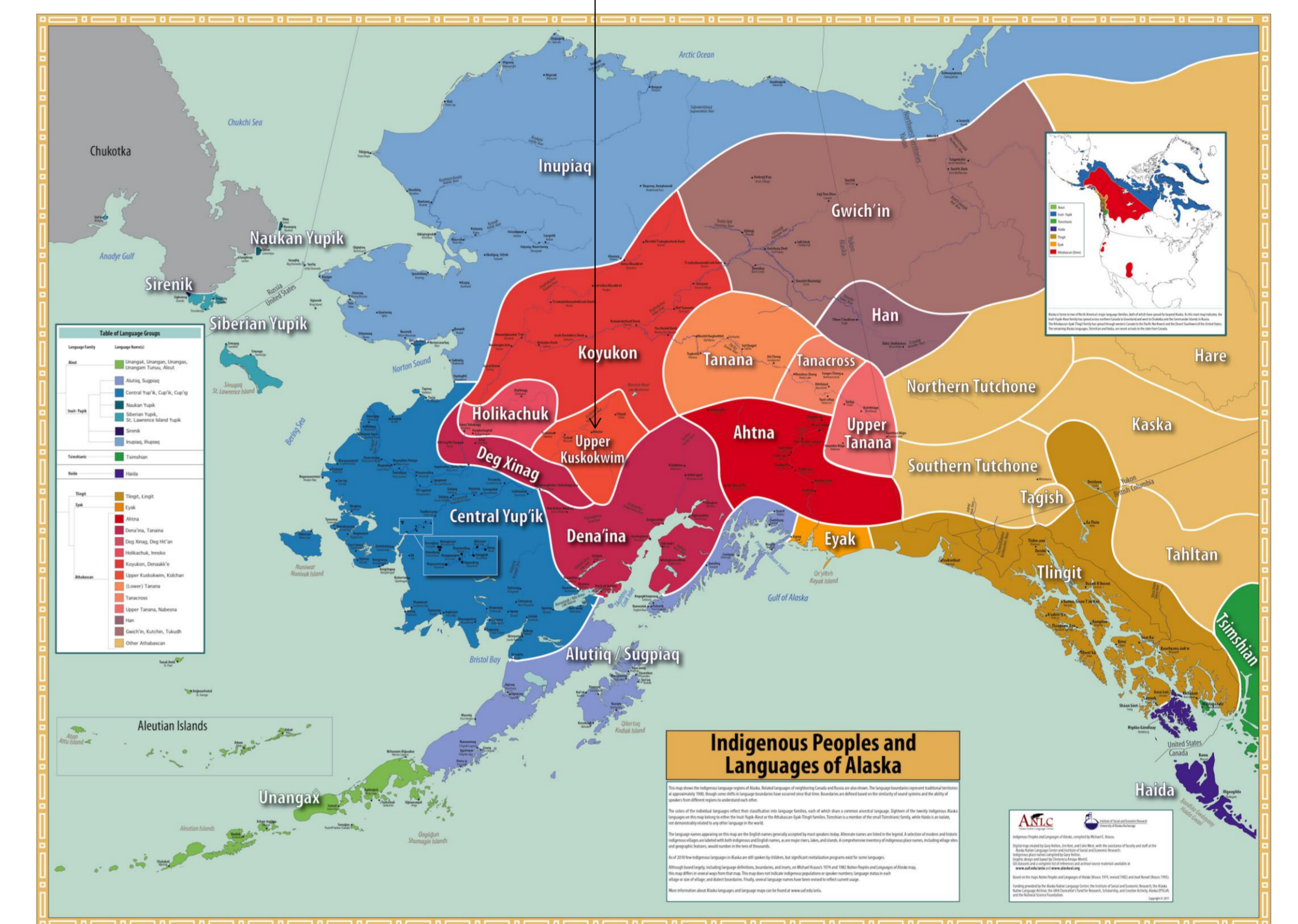
本研究では、2014年10月にサケ遡上地における人々の活動を記録した。サケ遡上地において、サケを捕獲しようとするハイログマの狩猟とビーバーダムの小規模な破壊がおこなわれており、ビーバーダムに空いた隙間からサケが遡上を再開したのを確認した。なお、一週間後、ダムの隙間はその場所を利用するビーバーの個体によって補修されていた。

現地調査から言えることは、(a)近年の漁業管理学で指摘されているビーバーの活動によるサケ稚魚の成育環境の向上と(b)内陸アラスカ先住民の人々が指摘してきたビーバーダムの増加による遡上阻害は矛盾しているわけではないことだ。人々の活動は、サケの遡上期という重要な局面においてハイログマによる捕食圧を軽減し、ダムの小規模破壊によってサケの遡上を助ける一方で、ビーバーダムがサケの生育環境に与えるベネフィットを損なわないようなやり方で組織されている。本研究の結果は、現地住民がみずからの生業活動を通して自然環境に関する豊かな在来知を形成しており、独自のやり方で自然資源管理をおこなってきた可能性があることを示している(近藤2016a)。

⑤現地住民の政策に関する要望と将来の生活設計

ディチナニク人の人々は、重要な食料源であるヘラジカやマスノスケの個体群を保全する必要性を認識している。そのため、現地住民が資源管理に関する裁量をより多く持つことができるような政策を期待している。

将来の生活設計としては、石油経済への適応として現金収入を得ることが必要と考えられているが、人々の中には石油経済への不信感が根強い。「昔のような自給自足の生活をするときが再びやってくる」と人々が語り、そのような生活への再適応の方策として、「文化キャンプ」と呼ばれる次世代の狩猟や漁撈の担い手育成に向けた取り組みがおこなわれている(近藤2016b)。



アラスカ先住民の言語集団分布図(アラスカ大学アラスカ先住民言語センターより)



左：マスノスケの捕獲に利用されたヤナ。1960年代以降、使用が禁止された。
 写真の出典：R. Collins 2004 *Dichinaneq' Hwt'ana: A History of People who Live in Nikolai and Telida*. National Park Service.
 右：捕魚車は20世紀初頭に導入された。毛皮を効率的に集める上で犬ぞりが有効であったが、犬の多頭飼育をするためには餌となるサケを大量に捕獲する必要があった。捕魚車の導入によって、その問題が解決された。(撮影：近藤祉秋、2013年6月)



サケ遡上地におけるビーバーダムの小規模な破壊(撮影：近藤祉秋、2014年10月)

近藤祉秋(2016a)「アラスカ・サケ減少問題における知識生産の民族誌：研究者はいかに野生生物管理に関わるべきか」『年報人類学研究』6: 78-103.
 近藤祉秋(2016b)「狩猟・漁撈教育と過去回帰」シンジルト・奥野克巳共編『動物殺しの民族誌』昭和堂, pp. 293-326.
 近藤祉秋(2017a)「石油時代のアラスカ先住民社会：自然・人・産業」『寒地技術論文・報告集』33: 18-23.(CD-ROMでの配布)
 近藤祉秋(2017b)「ボブ老師はこう言った：内陸アラスカ・ニコライ村におけるキリスト教・信念・生存」『社会人類学年報』43: 57-78.

⑥文献情報